釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔 ②

紡ぎ織りで後進を指導

羊毛を紡ぎ、染めて、織品に仕上げる工芸作家。毎年、道展に出品を続け20ってタペストリーなどの作年、ついに道展会友まで上り詰

色彩豊かに織り上げたウールを素材にしたタペストリーを手にする渡邉さん

工　芸

渡邉久美子さん(64)＝釧路市

13年度第85回道展で佳作賞入賞を果たし、昨年は、

めた。「作品づくりは時間が掛かります。一人で糸紡ぎから始めれば大変ですが、集中すると時間の過ぎるのも忘れるほど。完成したときの喜び、達成感が大きく、また次の作品のことが頭に浮かんできます」とにこやかな表情を見せる。

静岡県出身。夫の仕事の関係で02年に釧路へ。15年からは自宅で「紡ぎ織り教室」を始め、現在は富士見会館に場を移して工芸を趣味とする生徒たちを指導しながら、これまでに3度、釧路市内で作品展も実施してきた。

そもそものスタートは、道内旅行の時に草木染めの手織物との出合いから。それから自ら創作する世界に入り、釧路に移住して素朴で風合い豊かな自然素材での作品づくりに熱意を注ぐ。

今、自宅の居間には、糸紡ぎ機と大きな足踏みの織機が並ぶ。その織機の前に座って黙々と作業をする渡邉さん。そこには糸と対話しながら自分の思いをともに折り込んでいく工芸作家の姿が見えてくる。

（伊東義晃）